

令和2年度

兵庫県立視覚特別支援学校

支援部

アイ・あい だより



12月号

百円玉記念日

12月11日は百円玉記念日です。

1957年12月11日に、補助貨幣として戦後最初の百円硬貨が発行されたことに由来しているそうです。発行されてから今まで大きさは変わっていません。

発行された当初の100円硬貨は、素材が銀で図柄は鳳凰でした。

発行された当初の100円硬貨は、素材が銀で図柄は鳳凰でした。

＜発行年度1957年（昭和32年）～1958年（昭和33年）＞

1959年には、鳳凰から稲穂へと図柄が変更になりました。

＜発行年度1959年（昭和34年）～1966年（昭和41年）＞

1967年に、現在の100円硬貨である、桜の花三輪へと変更になりました。

100円硬貨の側面にあるギザギザは、全部で103個あります。100円にちなんで、100個ではないんですね。もし機会があれば、数えてみてください。



視覚障害者は、硬貨の場合、大きさや表面・裏面・縁の手触りなどで識別します。例えば、5円玉と50円玉は穴があいているという点では共通していますが、50円玉の方には外縁にギザギザがついていることや、大きさの微妙な差などで識別しています。しかし、10円玉と100円玉は縁のギザギザの有無や大きさ、刻印の違いなどで識別していますが、ほぼ同じ大きさのため全盲の人にとって見分けるのは簡単なことではありません。

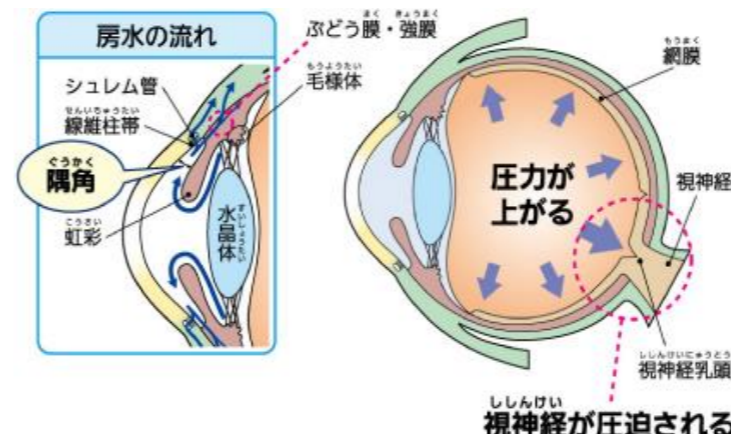
消費増税に伴い負担軽減策の一つとしてキャッシュレス化が急激に広がっています。現金での支払いに時間がかかっていた視覚障害者の中には、快適なキャッシュレス生活を送る人もいますが、知的障害や発達障害のある人など、「見えないお金」が苦手な人にとっては想像しにくいいため、キャッシュレスへの抵抗感があるようです。

クレジットカードやキャッシュレスは便利ですが、手間や時間がかかって面倒でも、自分の手に取り確認することも大事なこともかもしれません。



今回は、不規則性視野狭窄の代表的な「緑内障」についてお話しします。緑内障は、我が国における失明原因の第1位を占めており、日本の社会において大きな問題として考えられています。

緑内障の自覚症状としては、見えない場所（暗点）が出現する、あるいは見える範囲（視野）が狭くなる症状が最も一般的です。しかし、日常生活では、両眼で見えていますし、多くの場合病気の進行は緩やかなので、初期は視野障害があってもまったく自覚しないことがほとんどです。



「房水」とは、目の中を循環する液体のことで、毛様体という組織で作られて、虹彩の裏を通過して前房に至り、線維柱帯を経てシュレム管から排出され眼外の血管へ流れていくという定まった経路で循環しています。

房水の循環によって、ほぼ一定圧力が眼内に発生し、眼球の形状が保たれます。この圧力のことを「眼圧」と呼びます。房水の排出がうまくできなければ眼圧の上昇が引き起こされ、視神経が圧迫されて傷つき、目から得た情報が脳にうまく伝えられなくなります。正常数値は10～21mmHgです。眼圧には季節変動があり、夏季には低く冬季に高いことが知られています。

日本人に多い「正常眼圧緑内障」は、眼圧の数値が正常で自覚症状がないまま少しずつ視野が欠けていき、検診によって発見されるまで気付かない場合も多いそうです。そのため、検査では眼圧だけではなく眼底の検査が必要となる場合があります。



緑内障の児童・生徒のみなさんは、勉強や読書をする時は適度な明るさを確保し、頭が伏せがちにならないよう、視線が正面になるように書見台を使う等の工夫をしましょう。また、激しい運動や衝撃（高いところから飛びおりたりぶつかったり）が加わる行動は注意が必要です。